博士学位申請論文概要書

申請者　佐野智規

近代日本における対抗的世界像の生成
――菅野八郎・天理教・星野祭祀学のテクストを中心に――

本論文は、近代世界の内部において生産されながらも、近代世界とは異なる世界のあり方を記述するテクストについて、その分析方法と具体的な解釈を提示し、かつそれらのテクストが解釈困難なものとして了解されるメカニズムを、思想史的に論証したものである。

本論文の構成は、分析すべき対象の設定、分析の視座についての考察および具体的実践的な分析手法を提示した序章、第一章から第五章までの本論、および分析対象の特徴を総括的に考察した結論から構成されている。本論は内容上三つの部分に分けることができ、第一章では菅野八郎のテクストを、第二章から第四章までは一九・二〇世紀転換期の天理教にかかわるテクストを、第五章では星野輝興のテクストを、それぞれ序論で提示された分析手法を用いることによって分析し、新たな解釈を導出している。これらの分析作業によって、かつては解釈困難なものとして分析がなされていなかったテクストの内的論理と、それに規定された解釈困難さの機構が明らかになるとともに、分析手法の有効性が検証される。

序論はまず、解釈困難なテクストに着目し、このような解釈困難さが、原理的にはあらゆるテクストのうちにも観察し得ることを指摘する。解釈困難なテクスト、あるいはテクストにおける解釈困難な細部は、一般的な思想史においては、さまざまな操作によって解釈から除外されている。場合によっては、解釈困難なテクストを解釈から除外したことすら忘却されている。解釈困難さを除外し忘却する操作とは、内在主義である。この内在主義は、テクストの書き手への内在を標榜するいっぽうで、テクストそのものの全的解釈を断念する。すなわち、書き手の意図や意識、社会的関係性、あるいは思想といった次元を仮構し、この次元によって解釈困難さを上書きするという操作によって、対象としてのテクストの書き手に内在し得た、そして書き手の意図や社会的関係性の歪像としてのテクストを十全に解釈し得たと結論するのが内在主義である。それは、テクストの解釈を書き手の考察によって代置する還元論であり、同時に書き手の属性をテクストの内容と見做す反映論である。内在主義の操作を正当化するのは、テクストの書き手を、テクストの読み手とほぼ同様あるいはそれ以下の特性と能力をもった、単一の近代的個人だとみなす前提である。このような前提を内包した内在主義の操作は、解釈困難なテクストの解釈困難さの責任を、テクストの解釈者つまり読み手にでは

なく、テクストの生産者つまり書き手に帰する。すなわち、書き手における能力の欠如ゆえに、書き手の愚かしさがゆえに、あるいは書き手がみずからの意図や社会関係を十分に記述し得なかったがゆえに、テクストに解釈困難さが侵入してしまったのだ、と。したがって内在主義は、テクストの書き手への内在を目指すことによって、かえってテクストそのものを、特にその解釈困難さを捨象するし、その捨象を正当化してしまう。では、この内在主義の弊を回避しつつテクストを読むためには、どのような手法が必要なのか。またそのように手法によって解釈困難なテクストを読んだとき、どのような解釈が得られるのだろうか。さらに、内在主義によっては捨象される解釈困難さを、テクストの構造から説明することは可能だろうか。これが本論文の取り組むべき課題である。序論はつぎに、内在主義を回避してテクストを全的に読むための手法を紹介する。この手法として、近代性の歴史化、問いかけそのものの歴史化、分析の次元としての「手つき」、反復する諸概念の運動、非対称あるいは不均等な関係性、これら五項目が概説される。これらの手法は、本論における分析から抽象されたものである。本論文における作業の要点は、テクストを運動としてとらえ、運動として分析することにある。また本論文の方法の要点は、つねにテクストから出発すること、である。これらの操作によって、解釈困難なテクストが解釈可能なものとなり、テクストに対する全的な解釈の更新が遂行され得る。

第一章「鈍愚の潜勢力　菅野八郎のテクストにおける「愚」の問題」は、菅野八郎のテクストについての新たな解釈を提示する。八郎研究史は厚いけれども、しかしそのテクストはいぜんとして多くの解釈困難さに満ちている。多くの研究史は、テクストにしばしば登場するキイ概念を取り上げ、その概念の意味するところは何か、時間の経過、経験の深化とともにどのように意味が変化するか、あるいはしないか、それが八郎の現実的実践とどのような関係にあるか、などを考察していた。しかし研究史は、八郎のテクストにおける解釈困難な部分、具体的には八郎のテクストが固執していた「愚」をめぐる問題を、捨象している。テクストにおいて強烈な否定性として働く「愚」も、キイ概念分析として分析しうるのではないか。これがこの章の課題である。さてこの「愚」は、テクストの内的構成を撹乱するという運動性を持つ。それは八郎のテクストに繰り返し登場しながら、テクストじしんそれを排除しようとしていた。この解釈困難な「愚」が孕む問題を辿ることができれば、「八郎の思想」には還元できない、八郎のテクス

トじしんの運動性を、テクストから明らかにすることができる。本章は、テクストにおける「愚」の運動を、三つの時期に区分して考察する。それぞれ、八丈島遠島以前、八丈島遠島以降、そして明治期である。それぞれの時期に、ある種の開闢説が対応しているが、この開闢説が、テクストを媒介とした事物の探求の様式を規定し、かつ「愚」の運動性を規定している。第一の時期において「愚」は、リテラシーの次元の問題である。表層の秩序をもって事物の秩序だと取り違える「愚」かなひとびとは、拙ない筆運びで整わない文章を書き記した八郎のテクストを、「愚」なるものとして疎略に扱ってしまう。第二の時期における陰陽説との邂逅は、開闢説の構造を変容させ、したがって事物の探求の様式と、「愚」のありかたをも変えた。陰陽説的開闢説は、いわば「陰陽は文字に先立つ」というテーゼによって、リテラシーの次元に付着した「愚」の問題を、その根本から解消する。けれども陰陽説という知的原理は、それが原理性を持つがゆえに「愚」の問題を別の位相へと転移させる。テクストは、原理を得てもなお、貧苦からは脱し得ないみずからを自嘲する。さて第三の時期における近代知の登場は、陰陽説的原理それ自体を「愚」として否定する。テクストは、近代知が覇権を握っていることを認めながら、しかし陰陽説を放棄せず、また近代知の覇権を陰陽説的原理によって基礎づけることもしない。テクストは陰陽説そのものに新たな原理を導入することによって、近代知のいま・ここにおける覇権と、未来におけるその没落を論証する。したがってテクストはつぎのように示唆する。近代知からみれば「愚」であっても、それは近代知の不義にあらがう根源的な希望なのだ、と。以上が第一章の骨子である。

第二章・第三章・第四章では、一九世紀末から二〇世紀初頭にかけての、天理教にかかわるテクストを分析する。第二章「予備的考察　天理教研究に関わるテクストについて」は、つづく第三章・第四章共通の導入部である。それら各論において扱われる当該時期の天理教について、研究史テクストおよび当該時期に生産された歴史的テクストがどのような見解を表明していたのか、それらの見解を提示するにあたってどのようなテクストを、どのような方法によって解釈したかを確認し、それらの見解が総体として示唆するアポリアをどのように克服すべきか、解釈の方針を検討する。ここで得られた解釈の方針とは、つぎのようなものである。すなわち第一に、これら多様なる諸見解の相違を、研究史テクストの書き手の思想や立場性などによって説明するのではなく、

テクストそのもの、つまり研究史のテクストとその分析対象たる歴史的テクストから説明すること。また第二に、テクストをその外部にある実践に従属するものだと前提せず、まずはテクストじしんの内的論理を明らかにし、そしてテクストじしんの実践的効果を考察すること。これらの二つの方針である。

第三章「恐るべき愚民たち　天理教批判テクストにみる啓蒙の不可能性」は、第二章の考察から得られた方針をもって、当該時期の天理教批判テクストの内的矛盾を考察する。批判テクストはただ単に、天理教に対する事実無根の誹謗中傷と、近代知への絶対的な信頼から来る民衆蔑視に満ちたものであるように見える。それがゆえに研究史は、テクスト作者たちの思想や立場性などにテクストの主張を還元することで、批判テクストの検討を捨象していた。しかし本章は、批判テクストから分析をはじめる。さて、批判テクストによれば、天理教は「愚民」によって構成されている。テクストの定義によれば「愚民」とは、正しいものとそうではないものの区別がつかないひとびと、なんらの悪意なく、正しくないものを正しいものとして取り違えてしまうひとびとのことだ。このような「愚民」は、近代啓蒙の進展とともにいずれは滅亡するが、しかし国家社会に対するその害悪を鑑みればただちに撲滅せねばならない、とテクストは説く。批判テクストはある種の解釈困難さを持つ。批判テクストの解釈困難さとは、テクストじしんが啓蒙と撲滅の対象として措定した「愚民」にその理路を翻弄され、テクストみずからが「愚民」の撲滅が不可能であることを論証し、そしてテクストを除くすべてに「愚民」としての特性を見いだしてしまうことにある。なぜそしてどのように、この論理的混乱が生じるのかを考察することが、本章の課題である。さて、批判テクストの論理的混乱の根源は愚性、つまり正しいものとそうではないものが弁別不可能だという「愚民」の特性に求められる。「愚民」はその愚性ゆえに、啓蒙を啓蒙として認識することができず、むしろ反啓蒙的な天理教を正しい啓蒙として受容する。さらに「愚民」は、善意によってその得たところのものを拡散するがゆえに、時間の経過とともに増殖することを、批判テクストは論証する。したがって「愚民」は、論理的にも歴史的にも、啓蒙不可能である。ではどのような実践を、「愚民」のそれだとテクストは見做すのか。批判テクストは、いくつかの定型的な挿話によって、天理教の愚なる実践を描写し批判する。これらの挿話は二通りに解釈が可能である。すなわち、性的・経済的・衛生的規範の侵犯を非難していると読む解釈と、「不忠」「不敬」を

糾弾していると読む解釈、の二つである。どちらも妥当な解釈だけれども、テクストの歴史的特殊性を尊重するならば、前者を汲みつつ後者に重心をおき、資本主義的欲望の過剰態に対する非難が最終的には天皇制的規範への侵犯として糾弾される、その理路を検討するのが適切だ。「不忠」「不敬」は、啓蒙不可能を超えて「愚民」に対する糾弾を可能にする。すなわち愚性そのものが糾弾されるべきだ、と。ただしこの糾弾は挫折せざるを得ない。なぜなら「不忠」「不敬」に対して唯一の正しい「忠」「敬」を提示することは実践的にも原理的にも不可能であり、また「愚民」は愚性ゆえに、「忠」「敬」と「不忠」「不敬」とをそもそも弁別することができないからである。さて同時に「不忠」「不敬」の非難は、「愚民」の撲滅に参加しないひとびとにも向けられる。すなわち自己責任を口実に「愚民」を放置し、それをのさばらせておくことが既に、「不忠」「不敬」なのだと。批判テクストは、「不忠」「不敬」つまり天皇制的規範への侵犯を撲滅することこそが「慈悲」であると説く。ところで、このような天理教が国家においていまだ存在しうるのはなぜか。テクストは国家の天理教政策が不十分であることを繰り返し述べつつ、国家は天理教によって買収されたのではないか、と懸念する。それが示唆するのは、国家すらも正しいものとそうではないものが弁別できないという事態である。すなわちテクストは、国家のうちに愚性と似通った運動を見いだしてしまう。みずからの撲滅対象を「愚民」と措定したがゆえに、「愚民」のテクスト内的運動によって、批判テクストは論理的混乱へと陥る。以上が第三章の骨子である。

第四章「慈悲と資本主義　天理教教祖伝テクストにおける二つの世界」は、第二章の方針に沿って天理教教祖伝テクストを構成する諸挿話を分析する。教祖伝テクストは、教祖中山みきをめぐるエピソードを語ることを通じてある種の世界観を提示し、テクストそのものを媒介としたひとびとの共同性の構築を可能にする。まず教祖伝テクストは、批判テクストからの誹謗中傷に対して論駁しうる、みきについてのエピソードを提示する。それら諸挿話においてみきは、日常性を生きるひとびとからは思いもよらない非凡な実践によって、その身に降りかかる危機的状況を克服する。人知を超越したみきの実践は、その非凡さゆえにひとびとに理解されることはなく、むしろ迫害を被る。テクストはこのようにして、通俗的な知と愚の対立を、神と人との対立そして和解へとずらす。したがって教祖伝テクストは、みきの実践そのものを解釈困難なものとして措定するのである。この非凡な実践に対するひ

とびとの迫害という経験、そして「神人交通」という出来事を媒介にして、テクストはみきを、ムハンマドやイエスと同様の世界的聖人へと列する。かれら世界的聖人内におけるみきの卓越性は、それが時系列の終端、すなわち現在に出現したことに求められる。さて、人知を絶した神の領域に属するみきの実践を、教祖伝テクストはどのように語るか。人知によって理解し難いみきの諸実践の核心を、テクストは慈悲と呼ぶ。慈悲的実践は富の無限の放出、いわば資本主義的実践も求めるところとは正反対の実践である。この慈悲という概念が、みきにかかわる諸挿話にある種の全体性を付与し、かつこれらの諸挿話を媒介として、すべてのひとびとの当為へと拡張される。したがって天理教の布教されるべき領域、そして神の権能もまた、全世界へと拡張される。ところで、慈悲的実践を理解できずそれを抑圧するひとびと日常的なありかた、つまり富の無限の蓄積を目指す資本主義的実践に対して、慈悲的実践はどのような態度をとるのか。天理教の因縁論によれば、資本主義的欲望の過剰によって、人心が神の望むところから離れたとき、すなわち神とひとびととが不調和にあるとき、神は災厄を媒介としてひとびとに警告をなす。それが災厄であるという。このようなテクストの理路を逆に言えば、災厄をもたらさない程度の資本主義的実践が存在し得る、ということになる。したがって資本主義的実践は慈悲的実践を黙殺あるいは抑圧するが、神の領域に属する慈悲的実践は資本主義的実践をある程度までは許容する、という非対称性が生まれる。テクストみきの挿話を通じて、この非対称性を物質と精神という二つの領域に拡張し、それぞれに慈悲的実践と資本主義的実践とを割り振る。すなわち物質の領域における過剰な資本主義的実践がもたらす災厄は、物質よりも優位にある精神の領域における慈悲的実践によって緩和されるのだ、と。したがって慈悲的実践は、資本主義的実践の矛盾を希釈し得ても、資本主義的実践そのものの廃絶を目指すことはない。以上の分析は、教祖伝テクストを慈悲と資本主義の二領域の矛盾として読む解釈、いわば横方向の解釈である。加えて本章は、縦方向の読みを提示する。すなわち、慈悲と資本主義の移行領域における危機と救済の共有が、みきおよびみきにかかわるひとびとの経験と、教祖伝テクストを経験するひとびとの経験を結合するのではないか、という解釈である。たしかにテクストはこの領域を、ある種の神秘的な筆致によって描いているけれども、しかしこの神秘的な領域こそが、ひとびとの個別の危機的状況を結びつけ、救済を分有させる。これが、危機の重ね合わせとしての教祖

伝テクスト、という解釈である。縦と横、二つの解釈を総合したとき、何が言えるか。教祖伝テクストの提示する世界観とはつぎのようなものだ。すなわち、ひとびとの個別の危機は、さまざまなレベルの危機と原理的に繋がっており、かつそのような危機において、資本主義的実践から慈悲的実践への、有限なる人知・人力から無限なる神への、物質中心から精神中心の生活への、劇的な移行が行われる。したがってこの世界観は、テクストが慨嘆するグローバルな矛盾についても適用される。テクストの理路によれば、一国の植民地化もまた因縁のしからしむる結果なのだから、その悲劇的困難を緩和するためには、精神の領域に対する開拓が必要なのだ、ということになる。植民地主義批判は、精神の領域に対する植民地化を要請する。以上が第四章の骨子である。

第五章「勤労神アマテラス　星野輝興の祭祀学における「革命」の問題」は、長く掌典を勤めた神道家星野輝興の祭祀学を、そのテクストから再構成することにより、星野に対する諸見解の解釈困難な矛盾を解決する方途を提起する。すなわち星野は、アマテラス一神教によって天皇統治の世界性を否定する不敬学説の唱道者として糾弾され、敗戦後には日本国憲法における戦争放棄を賞賛し、同時に官製ナチス流ファシズム神道を案出した人物と見做されている。このような多様な見解は、もちろんそれぞれの思想や立場性に基づくものとして考え得るが、しかし本論文の方法の原則からして本章は、このような相矛盾する諸見解を可能にする、星野祭祀学のテクストの構成を分析する。さて、星野祭祀学の核心は、さまざまな問題のうちに境界線を彫琢してゆく、テクストの手つきにある。繰り返し登場する境界線の問題は、神と人との境界線に淵源すると考えられる。星野祭祀学は、この境界を曖昧にしてしまうことを、さまざまな問題において批判する。境界線の曖昧化とはすなわち、事実を批判的に観察せず想像によって事物の本来的なあり方を明らかにし得るという考え方、ひとびとの具体的努力なくしても神に熱誠が通じれば奇跡が顕現するという考え方、高度な神学的思索によって問題解決が為され得るという考え方、森羅万象は造化神によって創造されたという考え方、したがってすべての異なる領域の知を神道神学によって基礎付け、あるいはそれを媒介として統一し得るという考え方、などである。このように、星野祭祀学テクストにおける境界明瞭化の運動は、さまざまなスケールの問題に対して適用されるがゆえに、一種の自律性を宿す。すなわち、問題の大小にかかわらず、あるいはまた星野の意図や立場性、政治的社会的な要請に左右されず、境界

線の問題は同じように扱われなければならない、という星野祭祀学の自律性である。したがって星野祭祀学は、さまざまなスケールの問題が相似通った問いと答えの構造を形作るという意味において、いわばフラクタルな体系性を持つ。では、境界線の混濁を放置したとき、何が起こるのだろうか。神と人、本来的な日本の領域とそうではない領域、国体と近代知、たゆまぬ努力と熱誠を標榜した怠惰、事物の秩序と観念の秩序、最高神と造化神などの境界をあいまいにしたとき、テクストによれば、革命が起こる。星野のテクストにおける革命とは、直接的には王朝交替を意味する。けれども星野祭祀学の理路を敷衍して言えば、革命後の世界とは、ひとびとが努力することを放棄した、事物の進歩や成長がない、非農業国である。この革命は、現実的な努力を超越しようと試みる知識人たちの観念的な努力、および現実的な努力を放棄し未熟なままにとどまることを選んだひとびとの懶惰によって招来される。このような星野祭祀学の理路から考えたとき、一九四五年八月の敗戦そして占領は、どのように解釈されるのか。以上が第五章の骨子である。

各章での考察を総合し、結論においては、解釈困難なテクストの解釈困難さの仕組みそのものを考察する。テクストの解釈困難さは、テクストじしんの描き出した世界の二重性に起因する。テクストにおいて世界は、資本主義的実践の領域と非資本主義的実践の領域に分割される。それぞれはおおむね正反対の価値観を与えられているが、そうであるがゆえに反対側の領域に対する扱いもまた、異なったものとなる。すなわち資本主義的実践はその彼岸を、愚かで狂気に満ちた未開の周縁として理解するが、非資本主義的実践はその彼岸を、欲望と不義と不幸に満ちた哀れむべき空間として理解する。かつ本論文のテクスト解釈が明らかにしたのは、それぞれの領域における知の主要な様式が異なる、という問題である。すなわち資本主義的実践の領域が近代知を主要な知の様式とするのに対して、非資本主義的実践の領域は、象徴や言語の秩序を手がかりとして事物と世界の秩序を探求するというある種の技法を主要な知の様式としている。それぞれが、彼岸の論理を愚かなもの、秩序を欠いた真ならざるもの、と見做す。テクストの解釈困難さは、この知の様式の差異に淵源する。